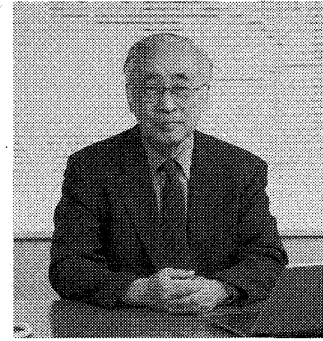


御 挨 拶

昭和女子大学大学院委員会委員長
昭和女子大学学長
平 井 聖



大学院の生活機構研究科が、創設されてから20年になります。はじめは家政学研究科のマスターコース生活造形学専攻と食物栄養学専攻だけで出発したのですが、2年経って、文学研究科が博士後期課程を学年進行によってもつことになったのにあわせて、博士後期課程の生活機構研究専攻を創設して、それまでの家政学研究科を生活機構研究科に改めたのでした。修士課程は、名称を生活文化研究専攻と生活科学研究専攻に改め、それぞれの包括する範囲を広げたのですが、これらのマスターコースの2専攻に対して、その上に乗った博士（後期）課程が生活機構学専攻1専攻でしたから、その内容には他大学の大学院にはない新しい工夫が見られました。修士課程の2専攻のそれぞれの内容をばらばらにして、新たな構想の3つの大講座に分けています。この3大講座は、生活文化研究、生活素材研究そして生活機能研究で、この構想がよく機能していれば、今頃は全くユニークな大学院が出来ていただろうとおもうのですが、残念ながら学部の従来型の縦割り制がどうしても克服できず、現在は学部の学科別に入学試験が行われるなど有名無実化しています。それとともに、修士課程も増設されるたびに学部の学科に対応した修士課程となって、博士（後期）課程の生活機構研究専攻が創設されたときの構想は消滅する方向に向かっているといってよいでしょう。

20年経って、これから道を模索していく折に、18年前の博士（後期）課程、生活機構学専攻創設の時の構想を夢として無視してほしくないのです。博士後期課程のあり方を検討する時に、修士課程同様に安易に縦割りとするのではなく、学際的な領域についても自由な発想の研究ができるように、もう一度しっかりと考えてみなければならないのではないのでしょうか。これまでの20年を振り返るこの小冊子の中から、生活機構研究科の行くべき道が開ければいいなああとひそかに期待しているのですが、簡単なことではなさそうです。

これまで3年半大学院委員会委員長をつとめながら、このような文章を書いていることに忸怩たるものがありますが、今年度いっぱい任期を終わるに当たって、これからを担う皆さん方と共に大学院の将来を見通すことが出来ればと期待する気持ちでいっぱいです。